

かんざし

綾乃

ざく、ざく、ざく、ざく。

穴を掘るのは、死体なんかを埋めるためではない。殺人を犯してそれを隠そうとなどしているのではなく、隠したいのはこの簪。早鐘さまに貰った、たった一つのもの。

隠さねばならぬ。隠さねばならぬ。

しかし、穴が深くなるたび、スコップで土を掬うたび、私の早鐘さまへの疑心は深まり、この恋情は掬われぬのではないかと、苛立ちにも似た焦燥感に苛まれる。早く終わりにしたい。埋めてしまいたい。

もう、こんな深さでも構わない。埋めてしまおう。私は爪に泥の入り込んだ手でポケットを探った。気に入りの赤いスカートが汚れてしまう。そんなことはどうでもいいはずなのだが――そうだ、一度、早鐘さまに、「甘味さんは、赤が似合うな」と誉めて貰ったのだった。今まで、何故忘れていたのだろう。あんなに大好きな早鐘さまの言葉。

あれ、と疑問に思った瞬間、くらりと世界が回った。目玉が回るような不快感。すぐに治まったが、未だ不安があった。近頃、頻繁に起きる立ちくらみや目眩。

早く、簪を埋めてしまおう。ポケットからそれを出し、穴の底へ置く。美しい、繊細なそれは、土色が似合わなかった。そっと土を手に取り、穴の上へ運ぶ、さらり、と、簪の上にかかる。

美しいものを汚す、罪悪感を覚えた。けれど、一度土をかけてしまえば、次々、元通りに穴を埋めた。スコップで土をならし、目印を考えた。目についた、近くに有った大きめの石をそっと置く。音屋家の裏庭には、後ろめたい人間か、孤独を味わいたいご家族しか訪れないため、石を動かされるなど滅多に有り得ないだろう。

それを終わらせてしまうと、早鐘さまが何となく憎く、簪が名残惜しく、藤吉さまが羨ましく、妬ましく思えてくる。

「...手を、洗わなくては」

散水用の水道で手の泥を落とし、ひねったときについた蛇口のそれも水を掬って軽く洗う。

ひんやりとした水に濡れた手は、外気に触れるとかじかむほどに冷たくなった。

「早く部屋へ戻ろう」

呟き、手を擦り合わせてお屋敷へ駆ける。夕闇は苦手だった。昔話で祖母が「夜には悪い鬼が森をさ迷うのだ」と言っていたから。19歳になっても、森――一否、この屋敷の敷地内は、ただ、木が多いだけだが――は、怖かった。

「ただいま帰りました」

使用人宿舎へ戻ると、使用人頭の詮索したげな目を避け、すぐ部屋へ逃げた。

「あ.....」

スカートの汚れを思い出す。簪に気をとられて、すっかり忘れていた。

一人部屋で良かったな、と思う。着替えて、スカートを持って、洗い場へ行く。こっそりと泥を落とし、乾かす。部屋に戻るとすぐ、ベッドに入ってしまった。

とても眠い。だが、寝てしまったらきっと私は、早鐘さまと螢さまの夢を見る。それでも、明日の仕事のために、眠らなくては……。

……見た夢は、簪の夢だった。埋めないでおくれ、汚さないでおくれ、と憐れな声で囁く。目が覚めてから、ああ、あれは螢さまの声だった、と気づく。

汚れ一つない、美しい螢さま。泥が落としきれなかった、私の醜い、荒れた指先。

お金と言うのは、憎いものだ。

「甘味さん」

初めてお声をかけられたとき、わたしは十七だった。まだ、二年しか経っていないことに、今、少し驚く。

「は、……はい、早鐘さま」

「変わった名前ですね」

「……はい」

私はこの、興鞘甘味、という、ふざけた名前が、嫌いだった。甘いものは大好きだけれど、初めて会った人の前であんみつやケーキを食べると、甘味が甘味を食べている、などと、面白いことを言っているだろう、と言った顔でほざくのだ。私からしてみれば、もう何十回も言われなれた台詞なのだが。

「甘味、とは可愛らしい。僕も、甘味が好きで、羊羹などよく食べるんです」

「僕も甘味が好きで」という一言で、どきりと心臓が跳ねた。もちろん、私のことではないのだが。

その頃は、とても素敵な音屋家のご子息様、というだけだった認識も、早鐘さまが話しかけてくれるたびに、甘くときめきを帯びた、恋に近いものに変わっていった。

私から早鐘さまに話しかけることは、滅多になかった。それでも、何故だか早鐘さまは私に幾度も声をかけてくれ、ある日に、温室へ呼び出された。

早鐘さまは、私のことをもっと知りたい、と言った。使用人としてではなく、一人の女として。信じられない思いだった。早鐘さまがそれまで私にかけてくれた言葉は、皆覚えていた。声をかけられるたび、それを思い出すたび、早鐘さまに焦がれていた。

それから、早鐘さまと私は幾度も二人で語らった。自分達の名前の由来、好きな甘味などから始まり、うちには家族のことまで打ち明けあった。

早鐘さまには、お母様が二人いて、どちらが本当のお母様かわからないという。ご家族は皆、知っていて隠しているらしい。早鐘さま本人は、今の音屋家にいる暮さまではない方が本当のお母様だと考えているようだった。そうでなければ、隠す意味はないと。

「これはね」

と、早鐘さまは百合の描かれた簪を上着から出し、

「僕の実の母——と、信じている人——の、簪なのだよ」

「早鐘さまの、お母様の……」

「キリ、という方なのだそう。どういう字を書くのかはわからない。僕を生んですぐ、亡くなったのだろう、ただ、この簪だけは、父が僕にくれた。僕を憐れに思ったのだろうね」

「そうなのですか……」

「けれど。男の僕には簪は必要のないものだからね。一番好きになった女性に、一生持っていて貰いたいんだ」

「素敵ですね」

早鐘さまは、簪を摘まみ、私の束ねた髪にあてた。

「よく似合う」

それを聞いて、私は、恐らく顔を真っ赤に染めていただろう。いつか、早鐘さまが私にそれをくれるところを想像した。

早鐘さまは簪をしまい、柔らかく笑んだ。

銀縁の眼鏡の向こうの、穏やかな瞳を見詰める。使用人の私が早鐘さまの正面にいるというのは、きっと、良いことではないのだろうと思った。けれど、その、黒に少し紫が混じったように見える瞳はとても美しく、目が離せなかった。こんなにも美しくて素敵な方に使ってもらえる私は、きっと、世界で一番幸せな使用人だろうと思った。

ある日に、朝の挨拶をすると、早鐘さまは一瞬であったけれど、困ったような顔をした。何故だろう、と戸惑っていると、暮さまが私を睨んだ。

私と早鐘さまが時々二人で居ることは、屋敷の人間、音屋家のご家族、使用人、周知の事実だったので、暮さまには良い顔をされていなかったのも、また、としか思わなかったが、暮さまは初めて私に話しかけた。

「貴女、屋敷から出て行って頂戴」

「は——……」

早鐘さまをたぶらかす小汚ない使用人。そう思われているのだろう、だから、出ていけと言われたのだろう、一瞬で考えたのはそれだった。

しかし、これまで見ないふりをしてきて、何故、今？ 訳も分からずにいると、暮さまは追い討ち

をかけてきた。

それこそが、衝撃だった。

「早鐘は、藤吉家の螢さんと婚約するのよ」

気が付くと、私は、早鐘さまのお父様、音屋草次さまの書齋に馬鹿のように立ち尽くしていた。

「興鞘、と言ったか」

「はい、旦那さま」

「幾つだ？」

「十九になります」

「早鐘よりひとつ上か。……いや、そんなことは良いのだろう。興鞘。ここを出ていきなさい」

「……」

失礼に当たるのだろうが、私は返事をできなかった。

「出ていきたくないか」

「……はい」

「ならば、早鐘のことは諦めなさい、いいね」

「……はい」

草次さまの部屋を出ると、早鐘さまが学校から帰った制服のまま、私を待っていた。

「早鐘さま——……」

「甘味。結婚しよう」

初めての求婚は、誰よりも愛しい早鐘さまからの言葉であったのに、そうでないかのように、心へは届かなかった。早鐘さまも、本気ではあっても、どうしたって絵空事、現実的ではない。

「私は、いいのです。ご結婚なさってください。私は……私は、一生早鐘さまにお仕えします。それが、私の仕事なのでしょう」

「否、僕は……」

「だって、どうするのですか？ 結婚なんて、したって、誰からも祝ってもらえない。草次さまにも、暮さまにも、齒向かうことになります。きっと、駆け落ちでもしなければ、結婚なんてできません」

「……その通りだね」

早鐘さまは頷き、ポケットを探った。それはすぐに出てきた。百合の花の、美しい簪。

「これを、君に」

「えっ……、いけません、それは、藤壺さまに」

「否、僕は、藤壺さんのものではない。その証だよ」

涙が、目を濡らした。溢れないよう、溢れないよう耐えていたけれど、早鐘さまが、

「愛している、甘味」

と悲しく微笑むと、止まらなくなってしまった。

「……私もです、早鐘さま」

そう言うと、私は顔を醜くくしゃくしゃに歪めてしまい、笑っているのか泣いているのか分からないような顔を、両手で隠した。

そっとポケットに入れられた簪が、ほんの少しだけ、白いエプロンを重くした。

藤壺螢さまが、初めて音屋家の屋敷に来た日、私は何一つ仕事を任せては貰えなかった。使用人頭曰く、嫉妬をして、お茶を出させれば螢さまにかけろだろう、掃除をさせれば埃を舞わせるだろう、料理には何か良くないものを混ぜろだろう、とすることだった。

その為私は、螢さまを見ることはできず、ただ、宿舎で雑巾がけをしていた。

藤壺さま達が帰ると、他の使用人が、螢さまがどんなに美しく、清廉で、凜としていて、早鐘さまに相応しいか、私に語った。

――私には、早鐘さまの簪があるもの。

などと、余裕のある考えは、できなかつた。そんなに素敵な方ならば、早鐘さまも、好いてしまうに違いない。そして、私に、あの簪を返してほしいと言うのだ。

否、否、と、頭を横に降り考え直す。早鐘さまはそんな方ではないもの。

それでも、顔も知らぬ螢さまの笑みが思い浮かばれて、仕方なかつた。

その日はすぐだった。屋敷の門の前を、私が一人で箒がけしていた時、一人の女性が、私に声をかけた。

「君」

「はい」

きびきびとした、少年のような声の女性は、髪が長く、声に似合わぬ優雅な顔立ちをしていた。

「使用人かい？」

男性のような口調に少し驚きつつ、はい、と返事をする。

「君は、早鐘さまのことを良く知っている？」

「……いいえ、少ししか」

「少し。そうか、では、君たち使用人に、彼はどう振る舞う？」

「……優しく話していただきます。とても、優しく」

「そうか。では……」

女性が続けようとする、屋敷の玄関扉が閉まる音がした。

「おや」

「あれ、螢さん」

早鐘さまが、私と女性――螢さまを見て、声を上げた。

「ほ、……螢さま……？」

「まあ、ごきげんよう、早鐘さま」

突然女性らしいたおやかな声に変わった螢さまに、私は呆けてしまう。

「こんにちは、何かご用でしたか？」

「いいえ、偶然通りかかりましたの。お顔を見られたらと思ひまして……けれど、お出掛けですのね」

「ええ、少し、学校の方へ」

螢さまは早鐘さまを見送り、私に向き直った。

「……すまないね、癖みたいなものなんだ。男性には女性らしく振る舞わないといけないという、強迫観念みたいなものか」

「い、いえ……」

「それでは、私は失礼するよ。また何度か……否、嫁げば毎日会うことになるかもしれないね。宜しく」

「はい」

去っていく背中を見て、あんな方ならば、きっと私は嫉妬せず使えることができるだろう、と思った。早鐘さまには、似合わないけれど、相応しい。

冬が近づく。枯れ葉で掃除が大変になったように思う。螢さまが嫁いでくる頃には、庭の池も、水鳥がいなくなり、氷が張ることだろう。

私が玄関に花を活けていると、暮さまが通りかかって、

「下手な活け花ね」

と、呟いた。

「申し訳ありません」

「貴女には期待してないわ。……それより」

つい、と、私の前髪を縦になぞる。早鐘さま以外のご家族に触れられたのは初めてだったので、体が固くなった。

「簪を貰ったでしょう」

「は……」

簪。

誰に、とは言われなかったが、簪と言えば、早鐘さまが、お母様から受け継いだ百合の簪しか思い当たらない。

「あれは、捨てなさい」

早鐘さまに返すようにと言われるのだと思っていた。

何故、わざわざ捨てなければならぬのか――。

「早鐘に返しては、傷付くだけでしょ。どこか……」

そこまで話したところで、暮さまは口を閉じた。気配に後ろを振り向くと、草次さまが腕を組んでこちらへ歩いてきた。

「簪の話か」

「ええ、捨てるようにと」

「捨ててはいけない。……裏庭にでも、埋めなさい。私とキリの品だ」

「今更あんな女の話など――だいたい、早鐘とは何も」

再び暮さまは言葉を

早鐘さまとは、何も？

そっとその目を見ると、ひそめた眉の下の瞳に、ちらりと紫色の光が映るのが見てとれた。

キリさまは、早鐘さまとは。



何も。

何も、関係がない？

「そんな」

「……」

「ならば何故、簪を」

「……あの簪は、桐の娘みたいなものなのだ」

桐さまは、体が弱く、子供を産むことができなかった。病床で、器用だった手先を使い、黒い簪に、自らの手で百合を描いた。幾度も幾度も失敗して、やっとできたのが、私が早鐘さまに貰ったそれだった。

「だから、どうか、手放して……しかし、無くさないで貰いたいんだ」

「私が持ち続けていては、いけないのでしょうか」

「当たり前でしょう。早鐘の一番最初の贈り物が貴女だなんて、許されないわ」

ふわふわとした気持ちだった。どうしたのだろう。ここはどこだろうか。ああ、草次さまのお部屋だ。

目の前には白い服――恐らく、医者が居る。なにやら、私に話しかけている。私は病気になってしまったのだろうか。それほど、早鐘さまのことが衝撃的だったのだろうか。

「聞こえますか、興鞘甘味さん」

聞こえ、ます。

「貴女は、どうにかして、簪を埋めてしまわなければなりません」

……嫌、です。

「埋めれば、貴女の恋も、うちに報われます」

……本当に？

(ざく、ざく、ざく、ざく。

裏庭に穴を掘り、埋めた私は、宿舎ですぐに寝てしまい、明くる日、目が覚めると簪のことを忘れていた。)

今日は、早鐘さまが結婚する日。お相手の螢さまもとても美しく、惚れ惚れするような夫婦になるなと思えた。

「どうだい？ 甘味」

「ええ、とてもお美しいです」

螢さまは優しく、使用人のことも丁寧に扱ってくれる。中でも私には、友達のように。

「私の旦那さんがどんなだか、もう見たかい？」

「早鐘さまですか？ まだです」

「最初は頼りないなあ、年も少し下だしなあと思ってはいたが、あれはいい男だ」

「ええ、早鐘さまみたいな方はどこにもいらっしません」

おお、惚れちまってるのかい、と螢さまがふざけるけれど、それがどんな意味なのか分からなかった。

螢さまが笑うと、しゃらん、と小さな可憐な音がした。なんだろうかと思っていると、螢さまは頭を指差した。

「簪の音だね。近づいてみてごらん」

いう通りに螢さまの後ろへ回ると、細い簪に、百合の花を模した細工、そこから下がる、金属の細い簾のようなものがあった。それがぶつかり合って鳴った音らしい。

「綺麗な――」

――百合。

それまでぼんやりと、暈しが掛かっていた景色が、突然はっきりと見えた。

私の気持ちを、あそこへ埋めた。

あの、建て直す屋敷の、裏庭に。

エプロンのまま駆け出して、着いた音屋家の屋敷では、元の屋敷の解体が行われていた。裏庭には、木が一本も無くなってしまっていた。

「お嬢ちゃん、危な——」

「ここに……ここにあった石は」

「ああ、あれなら、邪魔だっていうんでどけてしまったよ」

木も石もなければ、簪は見つけれない。

何故、今まで忘れていたのだろう。こんなに、大事なもののなのに。

スコップもない、あてもない、ひたすら指で、爪で、穴を掘っていく。

薬指の爪が剥がれた。痛くて、それでも掘って、砂が血に滲んで、とても痛くて。

爪よりも、綺麗な手よりも。

早鐘さまのことと同じくらい、大切に、壊れてしまうのが怖くて。

掘っているうちに、この頃の早鐘さまの表情が思い出された。

私が、早鐘さまを好きだということを忘れてしまっていたこと。きっと気付いていた。

どんなに失望させたらどうか。もしかしたら、悲しませたらどうか。傷付けたらどうか。

目が潤む。痛みや悲しみのせいなのか、少し高揚しているせいなのか。

ああ、でも。やはり簪が、見つからないのだ。

「甘味」

優しい、温かい、愛しい声に顔を上げると、そこには真っ白い服を着た早鐘さまが、息を荒げて私に向かって屈んでいた。

「早鐘、さま……？」

「思い出したんだね」

「……はい。ごめんなさい。忘れてしまって、思い出さずにいて、早鐘さまを失望させてしまっ

て」  
「失望なんて！ 僕は、君がいなくなったと聞いて、思い出してくれたのだと気づき、どんなに嬉しかったか。僕が君を苦しめて、忘れずにはいられなくなってしまったのかと思った」

早鐘は私の傍にしゃがみこみ、素手で地面を掘り始めた。

「早鐘さま！ 汚れてしまいます」

「君はもうそんなに泥だらけじゃないか」

「私は……私は良いのです。でも、早鐘さまは結婚式が」

「……螢さんとは、向こうから、『いずれ離縁するだろう』と、言われていたんだ。彼女は、他に好きな——恋する人がいるんだ」

「女が、と言ってくれて構わないのですよ、早鐘さま」

しゃらん、と可愛らしい音がして、今度は螢さまが私たちを見下ろしていた。

「私は女しか愛せないのだと。……そんなことより、これをお使いくださいな」

婚礼衣装には似合わない、それ——大きなシャベルをこちらに差し出した。

逆行で女神のように美しい螢さまからそれを受けとる。

ざく、ざく、ざく、ざく。

以前よりも大きな音で、地面を掘っていく。

シャベルで簪を壊してしまわないか心配だったが、思い切り、かつ、そっと掘る。

「――甘味！」

シャベルで掬った土を探っていた早鐘さまが、声を上げる。

まさか。

「あった……！」

喜びと同時に私の顔は青ざめただろう。

確かに、その愛しい手に収まっていたのはあの簪だった。

しかし、ぽっきりと、折れてしまっていた。

「ああ……ごめんなさい、私」

「いいんだよ。君の物だし、君が思い出してくれたなら、掘り返さなくたって良かったんだ。

今気付いたよ」

早鐘さまは優しく言ってくれたが、やはり、悲しんでいるのだろう。胸が苦しくなった。

「大丈夫ですわ、接着剤で元通りに付けてしまえばいいのです」

「けれど」

「……甘味。君が自分の子が産まれたら、その子のために簪を作ってあげたら良い」

「そんな」

私に子なんて産まれな。草次さまも暮さまも、許してはくれない。一番愛しい人と一緒になること。

呟くと、早鐘さまは私の肩を抱いた。

「父も、母も、ほら」

早鐘さまが指差す方を見ると、ご両親、二人がこちらへ駆けてきた。

「甘味」

暮さまに初めて、名前で呼ばれた。驚いていると、

「こんなに泥だらけで。みっともないわ」

いつも通りにきつい言葉を浴びせられたが、目元は潤んでいた。

「桐」

草次さまと暮さま、二人が同時に、私をそう呼んだ。

「え……？ 私は」

「分かっているわ。興鞘甘味。でも、貴女がどうしても、桐に見えるのよ」

「……桐も、暮が無くした櫛を探して、お前のように泥だらけになっていた」

知らなかった、早鐘さまの二人目のお母様の姿が、朧に、私に照らし出される。

「そのせいで、肺炎に」

暮さまは確かに、美しい、睫毛の長い瞼を瞬きして涙を落とした。

「でも、お母様は、桐さんが嫌いだと」

早鐘さまは困惑した表情で呟いた。

「嫌いよ。嫌い。私より、何も勝ってなんかいなかった、なのに、誰より愛されて。何を言っても泣かなくて、私にも優しくて。こんなに」

「.....そんなに、好きだったんですね」

螢さまが、穏やかに言う。

暮さまは服が汚れるのも構わず、地面に両膝をついた。

「.....お願い、甘味。私を、許すと言って」

ふんわりと、また、膜に包まれたような感覚を覚えた。さっきまでとは違う、意識ははっきりしているのだけれど、なんだか、自分と周りの境目がわからないような、浮遊感にも似た感覚を。

「暮さん」

口から、私のものではない声が発せられた。暮さまも、草次さまも、早鐘さまと螢さまもはっと息を飲む。

「最初から怒ってなどいないわ。貴女のこと大好きよ」

「桐.....桐なの？」

「私は、私」

そう、私であり、桐さまである。ぽかぽかするのは、胸元に握った百合の簪。ぐるりと回り、早鐘さまに向き直ったとき、私の中から桐さまは消えていた。

「早鐘さま。早鐘さまのお母様は、暮さまです」

「え.....？」

「暮さまの目を、しっかり見てみてください。早鐘さまと同じ、綺麗な瞳です」

暮さまは私の前に進み出て、早鐘さまの前に立った。

「早鐘」

「お母様.....？」

「.....ええ」

暮さまが握った早鐘さまの手にぼろぼろと落ちた涙は、とても美しかった。

「桐みたいに、どこかへ行ってしまわないで」

「どこにも、行きません。お母様」

ふんわり笑った早鐘さまは、暮さまに似て、とても美しかった。

私と早鐘さまの子が産まれたら、桐と名付けよう。

暮さまがそう言ったのは、まだお腹の中にいる、性別も分からないうちだった。

草次さまは、画数の多い立派な名前を考えただけで、私は学がないため、漢字を間違えてしまいそうだと正直に白状すると、皆を笑わせてしまった。

螢さまは女性のパートナーを連れて度々家を訪れてくれ、変わったところは、男性相手にも、あの男らしい口調で話すようになったことだ。

「甘味」

「はい」

重いお腹に左手をやり、右手を早鐘さまと繋ぐ。左手の薬指は、爪が未だいびつな形をしているが、根本には細い指輪がはまっている。

「きっと、女の子が産まれると思うんだ」

「何故ですか？」

「簪の似合う、綺麗な娘。名付けるなら、」

百合、と、付けよう。

私は肯定するとも否定するともなく、笑い、

「優しい子になりますように」

と、空に祈った。